

夫婦パスタ日記

第8話『納豆とオクラのネバネバパスタ』

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

広田 節子（69） 専業主婦
広田 勇（76） 節子の夫、元建設会社役員

広田（長沢） 唯（17）（30） 節子と勇の孫娘、パティシエ

長沢 聡志（21） 唯の幼馴染（当時）
寺川 千晴（25） スーパー『ユーミー』レジ担当

唯の担任教師

1 寺院・墓地

節子と唯が『広瀬家之墓』と彫刻された墓石の前にいる――花を供え、柄杓で墓石に水をかける唯と、線香に火をつける節子。

節子「（墓石に向かって）唯が来てくれましたよ」

節子と唯、合掌をする。

唯「早いね。おじいちゃんが亡くなって、もう六年経ったんだ」

節子「何だか、あつという間な気がするわ」

唯「本当はお盆にお墓参り来たかったんだけどね」

節子「しょうがないわよ、聡志君との旅行は、どうしたってお盆じゃないと行けないでしょ。おじいちゃんだって、分かってくれるわよ」

唯「今日も、聡志来られなくて、ごめんね」

節子「良いのよ。聡志君、元気にしてる？」

唯「うん。今日も仕事の打ち合わせだった。」

行けなくて申し訳ないけど、ゆっくりして
きたら良いって」

節子「相変わらず、唯は大事にされてるのね。
それに、聡志君も仕事が順調なら何よりじ
やないの」

唯「まあね。（と苦笑して）何でもっと早く
あいつと結婚しなかったんだろう」

節子（N）「孫娘が、結婚式は挙げず、婚姻
届一枚で済ませたことが、私にとってのわ
だかまりでもありました。息子夫婦の結婚
に反対したこともあり、孫娘の結婚の時に
は盛大に花嫁衣裳を着させてやりたいと思
っていました」

タイトル——『夫婦パスタ日記』

第8 話『納豆とオクラのネバネバパ
スタ』

2 広田家・居間

昼過ぎ——。

節子と唯が、紫芋タルトとコーヒーを口にしながら談笑している――テーブルに置かれている名古屋土産のお菓子。

節子「名古屋の旅行、どうだった？」

唯「久しぶりの旅行だったから、楽しかったよ。結構いろいろ見て回れたし」

節子「名古屋って、ご飯が美味しいイメージがあるわよ。まあ、最後に名古屋に行ったのなんて、いつ以来だろうって話だけどさ」

唯「鉄板ナポリタンが美味しかったの。お盆だからさ、休みになってるお店が多かったんだけど、調べたら年中無休の喫茶店があるってね、そこで食べてきた」

節子「ああ、あの鉄板に卵敷いてるやつ？」

名古屋名物だもんね」

唯「聡志が小さい頃、名古屋に住んでたおじいちゃんたちと食べたことがあるんだって。だから、本場の味ってやつがどんなものかなと思って、一緒に食べた」

節子「旅行に行ける余裕があるってことは、

何とかやってるんだ」

唯「旅行貯金っていうのを、お互いに地道にやったからね」

節子「まあ、何とかやっつけていけてるんだったら、おばあちゃん何も言わないけどさ」

と、紫芋タルトを食べる。

唯「おばあちゃん、そのタルト美味しい？」

節子「美味しいよ。甘さがそんなにくどくなくて、芋の甘味がしっかりしてる」

唯「良かったあ。それね、私が企画した商品なの」

節子「企画ってことは、唯が考えたってこと？」

唯「うん。今年の春からね、うちの店じゃ、従業員で商品を考えてみようっていう試みが始まってね。私も何回か挑戦してみて、今回ようやく初めての企画が通ったの」

節子「へえ、そりや大したことじゃないの」
唯「あまりも嬉しかったから聡志に報告したの。そしたら、聡志も喜んでくれて、パス

タ作るために買ったという赤ワインで乾杯しちゃった」

節子「聡志君のパスタ、美味しんだっけ？」

唯「うん。そのワインはね、ボロネーゼを作るために買ったらしいんだけど」

節子「聡志君も、唯のことになるとやっぱり嬉しいのね」

唯「そうだね」

節子「自分で考えたものが商品になるなんて、続けて良かったわね、お菓子職人」

唯「そりゃ、専門学校まで行ったんだもん」

節子「専門学校でも、あんた頑張ってたもんね」

唯「大変なこともあったけど、私にとってあの二年間は良い思い出だよ」

節子「唯、あんた覚えてる？」

唯「何が？」

節子「高校の三者面談の時のこと」

唯「（思い出して）ああ（と苦笑する）」

3 高校・全景（回想）

T 『13 年前』

節子（N） 「それは十三年前、唯が高校二年生の時です。この時、夫は唯の親代わりとして、三者面談に行っていました」

4 同・教室

唯（当時17）と勇（当時76）、担任教師が向かい合って座り、三者面談の最中。

担任 「進路希望調査によると、唯さんは就職希望ということですが、おじい様もそれは了承されているということ、よろしいですか？」

勇 「え？」

と、驚いたように唯を見る――勇から目を反らしている唯。

勇 「（担任に）はあ……まだじっくりと相談したわけではないのですが、基本的には孫の意思を尊重しようかと」

担任「もし大学や専門学校に進学する場合は、二年生の後期、つまり十月から通常の授業とは別に補習授業というものを受けることになります。進路がまだ決まっていなくて、三年生から補習授業を受ける生徒もおりますが、こういうのは早いに越したことはありませんので」

勇「そうですよね」

担任「おじい様とおばあ様で親代わりをされているということは、私も承知しておりますので、もし進路のことで何かご相談があれば、遠慮なくご連絡ください」

勇「ありがとうございます」

唯「……」

5 広田家・玄関

勇と唯が帰宅する――居間から節子

（当時 69）が出てくる。

節子「お帰りなさい」

唯「ただいま」

と、階段を登ろうとするが、勇、それへ、

勇「唯。じいちゃんの部屋に来なさい。話がある」

と、先に夫婦の部屋に入っていく。

節子「（不安そうに）唯、おじいちゃんとかあつた？」

唯、答えずに夫婦の部屋に入る――怪訝な顔の節子。

6 同・夫婦の部屋

勇と唯が話している。

唯「何、話って？」

勇「まあ、座れや」

と、二枚の座布団を敷く――それぞれ座布団に座る勇と唯。

勇「進路を就職希望にしてるって、今日初めて知ったよ。てっきり、専門学校に行くとかばかり思ってたからな」

唯「……」

勇「お前は、小さい頃から食べることが好きだっただろ。ばあちゃんの手伝いもしてる。それで、菓子職人……えっと、パティシエって言ったか。お前、それになりたいんじゃないのか。今日の三者面談で、全くその話が出なかったから、じいちゃん驚いたよ」

唯「……」

勇「パティシエになりたんだったら、就職じゃなくて、製菓学校に行くっていう選択肢だってあるだろ。ああいう学校だったら、ちゃんと専門的に技術が学べるんだから」

唯「……」

勇「別に私は怒ってるわけじゃないんだ。ただ、どうしてお前が、就職希望を選んだのかが知りたくてな」

唯「（うつむいたまま）だって、おじいちゃんたちの負担になるだろうし」

勇「負担？」

唯「私だって、学校の進路指導室で、製菓の専門学校の資料たくさん見たよ。学校によ

って授業のやり方とかも全く違うから、どれも良いなと思ってさ。けど、ほとんどが私立の学校でしょ。入学金とか、二年間の学費とかの資料見たら、とてもじゃないけど、おじいちゃんたちに専門学校に行きたいなんて言えなくて」

勇「……そうか。唯は、そんなこと気にしてたのか」

唯「親代わりとしてずっと育ててきてくれて、これ以上、わがまま言えないでしょ」

勇「バカ。自分の進路なんだぞ、わがままも何もないだろ。進路っていうのは、一生のことなんだぞ。仕事を変えるとか、転職するって話じゃないんだ。せつかく菓子職人になりたいって気持ちがあるんなら、そのまま専門学校に行った方が良い」

唯「おじいちゃん……」

勇「学費のことは気にするな。何とでもなる」

唯「本当に、専門学校行って良いの？」

勇「ああ。だがその代わり、途中で辞めるん

じゃないぞ。立派な職人になれ」

唯「ありがとう、おじいちゃん……。私、頑張ってパティシエになる」

大きく頷く勇。

7 同・居間（現在）

節子と唯が話している。

唯「そんなこと、あったね」

節子「あんたの亡くなったお父さんはさ、せっかく受験勉強も頑張ってた大学を途中で辞めたでしょ。だから余計に、唯には自分の進路に責任を持ってほしいって願ってたのよ」

唯「そうだね。確か、そのすぐ後だったもん。学校に専門学校に行くって進路変更の報告したの」

節子「製菓の専門学校に二年通ってから、無事に就職できたじゃない。そのタイミングで、あんたもこの家から出ていったでしょ。あの時ね、おじいちゃんもおばあちゃんも、

第二の子育てがようやく終わったって達成感を抱いたのよ。でもね、同時にやっぱり寂しさもあつたわ」

唯「おばあちゃん……」

節子「夫婦二人だけの生活ってさ、あんたのお父さんを産んでからは初めてだったから」

唯「お父さん、大学はここから通ってたの？」

節子「そう。バイトだったり友達と遊ぶとかで、深夜に帰って来ることもあつたのよ。」

まさか、あんたのお母さんと付き合ってるなんて思ってもみなかったからね」

唯「そんな状態の時に、私が産まれたってわけだ」

節子「まあね」

唯「ねえ、今日、晩ご飯どうする？」

節子「唯が来たでしょ。パスタでも作ろうかと思つて。（と何かを思い出して）あ……」

唯「……？」

9 同・居間ゝ中庭

節子（当時73）が洗濯物を干している――居間でテレビ中継されている高校野球の試合を見ている勇（当時80）。

勇「（テレビを見て）走れ走れ！ よし！

よし！ 逆転優勝！（と節子に）いやあ、逆転優勝だぞ。こりや、プロ球団から声がかかるだろうな」

節子「そんなに凄かったですか？」

勇「白熱した試合ってのは、ああいうことを言うんだろうな。六回裏まで一点も取れてなくて、私も諦めてたんだよ。そしたら、七回裏から急に挽回してきて、最後は逆転勝ちだよ」

節子「私は全然野球のことは分かりませんが、ただ高校生たちにとっては、一生忘れられない出来事になったんでしょうね。見

に来てる家族にも」

勇「そうだな」

節子「そろそろお昼ですね」

勇「昼飯どうするか？」

節子「そうですね。冷やし中華も、そうめんも飽きてきましたもんね」

勇「まあな」

節子「冷蔵庫に何かありましたかね」

と、洗濯物を干し終え、そのまま縁側から中に入り、台所へ向かう。

節子、冷蔵庫の冷蔵室と野菜室を開けると、納豆のパックと、緑色のネットに入ったオクラを見つける。そして、電子レンジの上の棚に、かつおぶしの袋が二袋だけ余っているのを見つける。

節子「さっぱりしたパスタでも作りましょうか？」

勇「さっぱりしたパスタ？」

節子「納豆とオクラが余ってるんですよ。夏バテ予防に、ネバネバパスタでも作ってみ

ようかと思つて」

勇「おお、健康そうだな」

節子「ちよつと足りない材料があるんで、出かけてきます」

10 スーパー『ユーマー』・全景

節子（N）「最近地元にオープンしたスーパーマーケット『ユーマー』。全体的に商品が安いのを数日前のチラシで見て、初めて足を運びました」

11 同・店内

買い物カートを引いている節子——買
い物かごに刻み海苔と刻みねぎが入っ
ている。

節子、卵のパックを入れると、それへ、
男性の声。

男性の声「あれ、唯のおばあちゃん？」

と、節子が顔を上げると、反対側から
聡志（当時21）がカートを引いてい

てやってくる。

節子「あら、聡志君じゃない」

聡志「親に買い物頼まれちゃって」

節子「今日初めて来たけど、結構安いのね。

特にお米とお野菜。今度からこっちで買い物しようかしら」

聡志「うちもそうしようって言ってます。唯、元気にしてますか？」

節子「ええ。菓子職人として、頑張ってるみたいよ。聡志君も、良かったら唯が働いてる店行ってあげてよ」

聡志「嫌な顔されませんか」

節子「聡志君なら、大丈夫よ」

聡志「まあ、お菓子買いがてら、今度行ってきます。それじゃあ」

と、去っていく——節子、各売り場を順番に回っていく。

12 広田家・居間

テレビがついたままで、座布団を枕代

わりにして眠っている勇——そこへ、
節子がい物から帰宅する。

節子「ただいま」

と、眠っている勇に気づき、呆れ顔で
見る。

×

×

×

以下、調理工程をカットバックで。

節子、包丁で、オクラのがくを剥く。

節子（M）「オクラ十本は、がくの部分を丁寧に剥く」

×

×

×

節子、ボウルにオクラを入れて、塩を
振って軽く揉む。

節子（M）「そしてボウルに入れ、塩を振って軽く揉む」

×

×

×

節子、水を入れて沸騰した鍋の火を止
める——計量カップの水を追加し、お
玉で卵二つをゆっくり入れ、鍋蓋をす
る。

節子（M）「次は、温泉卵の支度。鍋に水一リットルを入れて沸騰させたら火を止めて、一分ほど放置する。更に水二百ミリリットルを差し水として加えたら、お玉を使ってゆつくりと卵二つを入れる。そして、鍋蓋をして十五分蒸らす」

× × ×
節子、納豆のパック二つを、それぞれ付属のタレとカラシを入れて菜箸で混ぜる。

節子（M）「その間に、他の支度を。納豆のパック二つを取り出し、それぞれ付属のタレとカラシを入れてしっかりと菜箸で混ぜ合わせる」

× × ×
節子、大きめの鍋に水と塩を入れて、火にかける。

× × ×
大きい鍋の水が沸騰している——節子、そこへ、パスタを入れる。

節子（M）「大きめの鍋に水二リットルと塩
小さじ四杯を入れて沸騰したら、パスタ二
百グラムを入れ、パッケージ表記の通り、
七分間茹でる」

× × ×
節子、パスタの鍋の中に、オクラを入
れる。

節子（M）「途中五分経ったら、オクラを追
加して、一緒に茹でていく」

× × ×
氷水の入ったボウル——節子、そこへ
卵を入れる。

節子（M）「鍋蓋をしてから十五分が経ち、
卵を氷水の中に入れておく」

× × ×
節子、二枚の皿に、パスタとオクラを
乗せる。

節子（M）「茹で上がったパスタとオクラを
それぞれ、皿に盛り付ける」

× × ×

節子、一枚目の皿の中央に納豆を乗せると、スプーンでごま油と醤油を全体にかける。

節子（M）「皿の中央に納豆を乗せ、ごま油小さじ一杯と醤油小さじ一杯を全体にかける。同じ要領で、もう一枚の皿も同じように」

× × ×

節子、温泉卵の殻を割り、納豆の上にゆつくりと添える――二枚目の皿も同様に。

節子（M）「氷水から取り出した温泉卵を、納豆の上にそれぞれ乗せる」

× × ×

節子、二枚の皿に、刻み海苔と刻みねぎを、更になから添える。

節子（M）「刻み海苔と刻みねぎを適量、それぞれ上から添える」

× × ×

節子、かつおぶしの袋の中身をつまん

で、二枚の皿に散らす。

節子（M）「最後に、かつおぶし一袋をそれぞれに振りかけていく。特にレシピを見たわけではないが、冷やし中華やソーメンが続いていたので、たまにはこういうのも良いでしょう。これで『納豆とオクラのネバネバ Pasta』の完成」

13 完成した『納豆とオクラのネバネバ Pasta』

14 広田家・居間

節子が完成したパスタの皿と箸を、卓袱台まで運んでくる――いびきを聞いて眠っている勇。

節子「（勇の体を揺らして）あなた、パスタできあがりましたよ」

勇「（体を起こして）あれ、寝ちゃったな」

節子「パスタ、できましたよ」

勇「おお、美味そうだな」

節子・勇「いただきます」

と、それぞれ食べ始める。

節子「どうですか？ 何となくで作ってみた
パスタですけど」

勇「うん、これはいける。美味しいぞ」

節子「良かった。次もまた作ってみますね」

勇「この時期になると、どうも冷やし中華だ
ったり、ソーメンだったり、同じようなも
のが続くからな。盆に唯が帰ってきたら、
これ食わせてやれよ」

節子「そうですね。あ、そういえば今日初め
て『ユーミー』行ってきたんですよ」

勇「ああ、この間開店したあのスーパーか」

節子「お米とお野菜が安かったですよ。それ
に、今日買い物行ったら、偶然聡志君に会
いましたね」

勇「聡志も今、仕事してるんだろ？」

節子「確か、広告制作の会社でデザイナーし
てるみたいですよ。唯が教えてくれました」
勇「聡志、唯と結婚しねえかな？」

節子「え？」

勇「二人とも保育園から高校まで一緒だった
だろ。それに近所だしよ。家族ぐるみとい
うわけではないが、お互いの家族の状況だ
って何となく分かってる。お互いのことよ
く分かってる二人だから、結婚しても不
思議には思わねえけどな」

思わず笑う節子。

勇「何がおかしいんだよ」

節子「いえいえ。まさかあの二人が結婚だ
なんて。それに、唯は仕事が忙しくて、結
婚なんて考えてないんじゃないですか？」

勇「今すぐって話じゃねえんだ。ただ、唯が
このまま独身で、結婚しようって思った時
にもう周りに相手がいなかった、なんてこ
ともあり得るだろ。そうなった時、聡志が
嫁にもらってくれたら、私も安心できると
思ってたな」

節子「そうですね。唯が結婚かあ……。あ
の子、今年で二十一歳ですよ。まだ就職

して半年も経ってませんし、せいぜい結婚を意識するまで、五年ぐらいはかかるんじゃないありませんか？」

勇「そんなに待てるか」

節子「あの子が結婚したい気持ちがあれば、その時考えれば良いんじゃないですか？」

勇「相変わらず呑気だね、母さんは」

節子「だって、唯が結婚をして、誰かの妻になるっていう姿が想像できないんですもん」

勇「私は諦めんぞ」

呆れ顔になりながら、パスタを食べている節子。

15 同場所（現在）

『納豆とオクラのネバネバパスタ』やとうもろこしのスープ、海藻サラダを晩御飯として食べている節子と唯。

唯「へえ、おじいちゃんそんなこと言ったんだ」

節子「ちようどこのパスタを初めて作った時

だったわよ。あの頃から、おじいちゃんには先を見る目があつたのかもしれないわね。おばあちゃんね、唯が聡志君と結婚するって聞いた時は驚いたけど、多分おじいちゃんに言わせれば、『それ見たことか』って思ってるんじゃないかしら」

唯「でもおじいちゃん、どうして私が聡志と結婚するなんて思ったんだろ。当時は、全然聡志のことなんて気にも留めなかったのに。単なる幼馴染って感じだったから」

節子「年寄りの勘ってやつじゃないかしらね」
唯「確かに、おじいちゃん、勘鋭かったよね。高校の時の進路変更もそうだった。私が就職希望出した状態で担任の先生と三者面談したら、専門学校に行くと思ってたのになって言われて」

節子「そうだったわね。ああ、そういえばあの三者面談の日の夜なんだけどね……」

節子と勇が話している。

節子「そうですか。唯が、そんなことを」

勇「爺馬鹿かもしれないが、唯には好きなことをさせてやりたい。親代わりをしてくれた私たちに変に遠慮して就職するより、菓子職人になりたいんだったら、まずはちゃんとそういう知識や技術が学べる学校に行かせてやりたいじゃねえか」

節子「ええ、私も同じ気持ちです」

勇「学費のことは、大丈夫か？ 唯には何とかするって大見得切っちまったが」

節子「（笑って）大丈夫ですよ。具体的に、唯がどこの製菓学校に行くか分かりませんが、多分ああいう学校なら二年間通うんです。私立だとしても、二年間通うぐらいの学費なら用立てることぐらい」

勇「節子、ありがとう（と頭を下げる）」

節子「よしてくださいよ。唯は私たち二人の孫なんですから。私だって、そんな話聞かされたら、あの子に好きなことさせてあげ

たいって思いますよ。あとは、あの子がどこの学校に行くかを決めるだけですね」

勇「行きたいと思ってる学校の資料、いくつか候補を絞って手に入れるように、唯に伝えなきゃな」

節子「唯は孫というより、娘も同然なんですよ。あの子のために、何かしてやれるうちがハナですよ。私たちは、あの子の親なんですから。親だったら、子どもの希望を叶えさせてあげたいと思うのは当然じゃありませんか」

勇「ああ、そうだな」

節子「あなたが爺馬鹿なら、私は婆馬鹿ですかね」

苦笑し合う節子と勇。

17 同・居間（現在）

食器が空になっている――節子と唯が話している。

唯「やっぱり、専門学校行って良かった」

節子「（苦笑して）長年夫婦やってるとね、

考え方って似てくるのよ」

と、食器を片付けようとする。

唯「おばあちゃん、私洗うよ」

節子「良いよ。あんたはゆっくりしときなさい」

唯「良いから良いから。おばあちゃんこそ、せつかく私が来たんだから、ゆっくりしといてよ」

と、食器を台所へ運び、食器洗いを始める。

節子「良いの？ あんたに任せて」

唯「いつも家じゃ聡志が家事やってくれてるでしょ。私もたまには家事やらないと、いざって時にできなくなっちゃうからね」

と、節子の方を振り向いて微笑む。

節子（N）「息子と疎遠になってしまったがために、私にとって孫娘との初対面は、息子夫婦の事故死の知らせを聞いて病院に駆けつけた時でした。両親が事故死したとい

う状況を把握しているのかも分からない、
しかも初めて顔を合わせる孫娘に対して、
何をしてあげたら良いのか、あの頃の私は
夫と共に迷っていました。しかし引き取っ
て面倒を見るという考えはその場で思い立
ったことでしたが、それは夫も同様でした。
そこから本当の母親のつもりで愛情を注い
できた孫娘も三十歳になり、たくましい女
性に成長していると私は思っていました」

18 同・玄関（夜）

唯が出てくる——見送りに来る節子。

唯「じゃあね」

節子「今度は、聡志君も一緒に連れてらっし
やいね」

唯「うん。じゃあ、おやすみ」

節子「おやすみ」

去っていく唯の後ろ姿を見送る節子。

19 スーパー『ユミー』・表（夜）

唯がスマホで電話をしながらやってくる。

唯「（電話に）もしもし。今帰ってる途中で、『ユーミー』にいるんだけど、何か買うものある？ うん、食器用洗剤と歯磨き粉ね。分かった、じゃあそれ買ったら帰るね」と、電話を切ると、中へ入っていく。

20 同・裏口

職員専用通用口から、仕事終わりの千晴が出てくる――そのまま、夜の道を歩いていく。

つづく